

宛先のない言葉が氾濫する時代だ 素早く繋がれても胡散臭いものだ 自分で紡ぎ出すという時間が大切



永田 和宏

21 口ごもることの意味

一步先のあなたへ

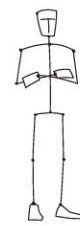
私たちの短歌雑誌「塔」が六〇周年を迎えたのを機に、過日、京都で記念シンポジウム「言葉への信頼と危機」を開催した。歌人高野公彦氏の講演のあと、哲学者の鷺田清一氏、評論家の内田樹氏と私の三人が「言葉の危機的状況をめぐって」と題し

た鼎談を行った。ありがたいことに会場は八〇〇人の定員をオーバーする盛況だったが、その鼎談で三人がそれぞれに話そうとしていたのは、奇しくも同じような内容であったと思う。

鷺田氏は、特に政治家らの言辞に、滑らかに滑っていく言葉と宛先のない言葉が氾濫している現状を述べ、言葉は意味のほかにその肌理によって届き方が違ふことを強調した。内田氏も届く言葉と届かない言葉について、いま生成した言葉だけが相手に届く、人は自分宛ての言葉にだけ反応するのだと応じた。私自身もこういう時代だからこそ、単純でわかりやすい言葉に同意するのではなく、「口ごもる」という形で発せられる言葉に信頼できる場所があることを、歌を示しながら述べた。

現代の思想界を代表するお二人であるが、ともに口ごもる、あるいは吃音という形で、言葉と身体感覚のズレについて話されたのが印象的であった。私はもう四〇年以上、歌を作ってきた人間だが、知らず知ら

ずのうちに、人が日常使っている「それらしい」言葉への警戒感というか、嫌悪感が人一倍強くなってきたのを感じている。誰もが普通に使う言葉、それを使えば容易に相手に同意を得られそうな言葉をいったんは呑み込んでみるという習性がある。そのまにか沁みついてしまったようだ。



誰もがわかってくれるけれども、誰も私のその時の感情を受け取ってくれない言葉が、「悲しい」「寂しい」といった形容詞である。〈その時〉だけの自分の感情を表すためには、そのような一般的な言葉では太刀打ちできない。自分だけの言葉を求めて苦闘するのが、短詩定型詩を作ることの意味である。

思えば、日常の会議などは出来あいの言葉のオンパレードである。偉いひとの挨拶も、どこかで聞いたなあと思ふフレーズで固められていることが多い。たぶん日常生活ではそれでいいのである。毎日顔をあわせる御

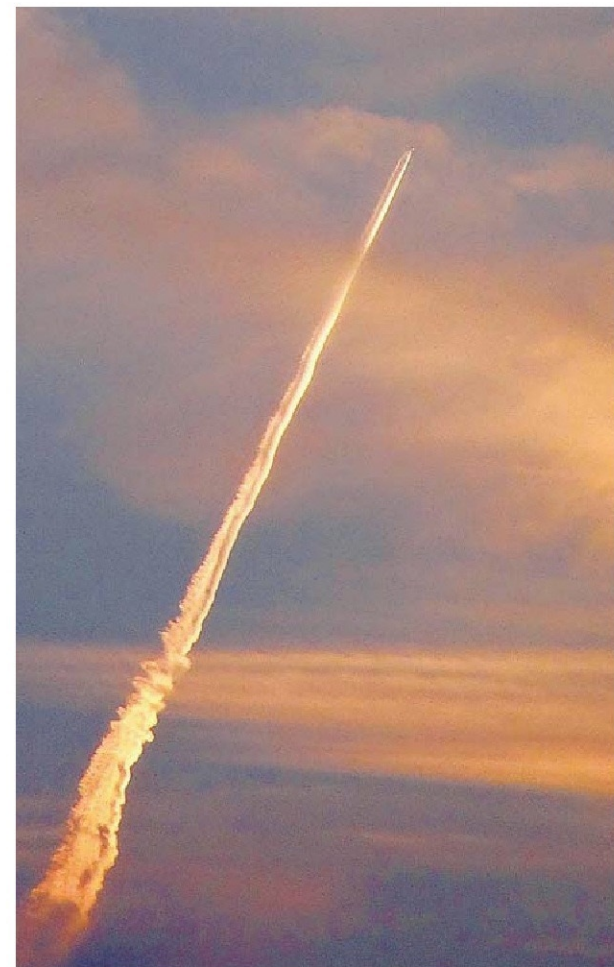
近所で、「おはようございます。今日は、川音もほがらかです。ねえ」なんて挨拶すれば、相手はへんな顔をするのは必定である(因みに川音のほがらかは記念大会の詠草中の一首から)。

しかし、あまりにも素早く相手と繋がれる言葉と言うのは、はあらかじめ相手にもその内容が想定されていて、それをなぞる言葉だからである。思考の枠組み自体がすでに共有されているという安心感の上で、単なる架橋としての言葉だからであり、こちらに新鮮な驚きと喜びをもたらしは少ない。それは私も知っている問題です。よという確認にはなっても、私の考えたことではないからだ。



前回、相談する相手の話を十分に聞かずに解決策を提示することのそらそらしさについて述べた。相手との一対一の関係のなかで、その場で一回性の新しさをもって紡ぎ出された言葉でなければ、相手の心に届くものにはならないだろう。

鷺田氏の『おとなの背中』のなかに、「他人とおなじ言葉を大声で口にかけているときに、その他人と唱和しているじぶんの姿を、そこから身を引くはがして後方から見ることが『考える』ことの基本ではないのか」というフレーズがあるが、まさに自分で考えるとは「他人と唱和している自分」をどのように相対化して見られるかという視線にかかっているのだらうと思ふのである。口ごもりながら、自分の言葉を探すという時間を、一度大切に思いたいのである。



夕焼け

1947年、滋賀県生まれ。京都大理学部卒業。京大再生医科学研究所を経て、現在は京都産業大総合生命科学部教授。歌人で、短歌結社「塔」主宰。

※コラムへの感想をメールでお寄せください。
minna@mb.kyoto-np.co.jp